トルストイの日記

―― 映画文学人生論

レフ・トルストイ（1828-1910)
『日記』(1847-1910)
『戦争と平和』（1864-69)
『懺悔』(1878-82)
『人生論』(1889)

昨日、ロシアの艦隊が壊滅したというニュースを聞いた。

一九〇五年五月十九日付の日記に、七十七歳のレフ・トルストイは次のように書いている。一九〇五年は、日本では明治三十八年にあたる。

昨日、ロシアの艦隊が壊滅したというニュースを聞いた。このニュースはなぜか特につよく私の心を打った。このことは、他のかたちではあり得なかっただろうし、あり得ないということが、私にははっきりわかってきた。――たとえわれわれが悪いキリスト教徒であっても、戦争とキリスト教の信仰とが両立し得ないということを隠すわけには行かない。最近（三十年前に知って）この矛盾がなお一層、自覚されるようになってきた。

日本は数十年で西欧やアメリカの民族に肩を並べたばかりか、技術的な向上の点では彼らを追い越してしまった。単に戦争の技術におけるばかりでなく、すべての物質的な改善の技術面での日本人の成功は、これらの技術的な向上、文化と呼ばれているものが、いかにくだらぬものであるかを明白に示したのである。

日露戦争でロシアのバルチック艦隊が壊滅したというニュースが流れたときの記述である。精神的な向上をめざすトルストイにとって日本の勝利

トルストイの日記

は物質的な技術面での成功にすぎない。そんなことより、戦争とキリスト教の信仰とが両立し得ないという記述が注目される。

キリスト教にかぎらず、ほとんどの宗教に「殺すなかれ」という戒律があるが、不思議なことに戦争はなくならない。むしろ宗教が戦争に利用される傾向がある。異教徒イスラム教国からの聖地エルサレムの奪還を大義名分とするキリスト教国の十字軍遠征はその代表的な例だ。

「殺すなかれ」という戒律を守ろうとすれば戦争には行けない。いわゆる徴兵(ちょうへい)忌避(きひ)を支持する立場をとることになる。そのような立場は、愛国心に訴えて若者を戦争にかりたてる国家の方針とは対立する。

日本人なら非国民(ひこくみん)として逮捕されるところだが、帝政ロシアの貴族トルストイ伯爵(はくしゃく)は逮捕されない。その代わりロシア正教会に批判的な態度をとったことを理由に教会から破門された。

トルストイは戦争に反対するとともに、死刑にも反対した。死刑も「殺すなかれ」という聖書の戒律に反するからである。人間だけでなく動物を殺すことにも抵抗を覚え、菜食主義者になった。アスパラガスを食べたことをソーニャ夫人から非難されると、「ソーニャが正しい」と反省した。

人々は愛によって生きている。だが、自己に対する愛は死の初めであり、神と万人に対する愛は生の初めである。